研究ノート

# 『霊魂の系図』について

## ——Carlyle を中心として——

松田福松

### (1) 序

維新の功臣・明治新政府の外務卿として，よく極東の小島国日本の名を，世界列強の間に重からしめ，征韓論破れし後は，聖帝の左右に，侍講として奉事し，元田永孚と並んで，その聖徳の玉成に，畢生の忠悃をかたむけた副島種臣(1828—1905)は，その『皇帝陛下巡狩中所得詩序』(『蒼海全集』巻六)の中で

『人間の原則は再生を以て本と為す。……伊尹と周公と同系，孔子と伯夷と同系。けだし，黄帝の分魂，是れ，伊と為り周と為るなり。帝顓頊の分魂，夷と為り孔と為るなり。……是れ，霊魂の系図なり。姓氏録，高皇霊(タカミムスビ)の後に載する者は，肉体の系図なり。神皇霊(カムムスビ)と書する者は，いはゆる，霊魂の系図なり。披いて之れを閲すれば，一目瞭然たり』(原漢文)

と言ひ，『臣は，則ち，文王の裔』と，自己の『霊魂の系図』をさへ，はっきりと断言して居る。

『肉体の系図』は，父子相続のものであって，必ず，時間と空間の制約の下にあるのであるが，『霊魂の系図』は，時空にかかはらず，時代を超え国境を絶し古今東西にわたって，自在無碍である。ここに，民俗の伝承として，『再生』の説話が生まれる。

古くは，聖徳太子(574—622)が，救世菩薩の再来と信ぜられ，百済(クダラ)

から来朝した異人日羅も，『敬礼救世観世音，伝灯東方粟散王』と唱へて，太子を拝し，更に年を経て，百済の使者として来朝した王子阿佐も，『敬礼救世観世音菩薩，妙教流通東方日本国，四十九歳伝灯演説』と言って，太子を拝したと，藤原兼輔の『聖徳太子伝暦』等に録せられて俗間に永く伝承せられ，遙かに世を隔てた後の親鸞（1173—1262）も，この伝説をふまへて，

『救世観音大菩薩，聖徳皇と示現して，多々のごとくすてずして，阿摩のごとくにそひたまふ』

と，その『正像末和讃』の中に，『和国の教主聖徳皇』奉讃十一首を残して居る。これらは宗教的信仰の告白とも言ひ得るであらう。

しかし，推古天皇十七年，呉国より肥州沿岸に漂着して，そのまま在留し，聖徳太子に奉仕した百済の僧道欣ら十人の者は，『太子が前世に唐土（モロコシ）衡山の般若寺に思禅法師として法華経講説の砌，自分らは盧岳の道士として時時参聴した者共である』と称したが，これは正しく『再生』の説話である。

更に，若き聖徳太子に道の師として奉事した高麗の僧慧慈は，帰国後八年，太子の薨去を伝へ聞いて大いに悲しみ，

『日本国に聖人有り，上宮豊聰耳皇子（カミツミヤノトヨトミミノミコ）と曰ふ。……三宝を恭敬し，黎元（オホムタカラ）の厄を救ひたまふ。是れ実に太聖なり。今，太子既に薨ず。我れ，国を異にすと雖も，心は断金に在り。われ独り生けりとも何の益か有らむ。我れ，来年二月五日を以て必ず死せむ。因りて以て上宮太子に浄土に遇ひ奉って，以て共に衆生を化（ワタ）さむ』（原漢文，『日本書紀』巻廿二）

と誓願して，満一年をへだてて，太子薨去の同月同日に没したと伝へられて居る。これは『再生』説話の精神的基盤をなす『霊魂の系図』を物語るものであって，われらは此処に言はれて居る『国を異にすと雖も，心は断金に在り』といふ慧慈の一句を特に記憶しよう。

中世・鎌倉時代に降って，明治の和歌改革者正岡子規が『人丸ののちの歌よみは誰かあらん征夷大将軍みなもとの実朝』『こころみに君の御歌を吟ずれば堪へずや鬼の泣く声聞こゆ』と歌って，万葉以後の唯一人と，その歌を推称した将軍実朝（1192—1219）についても，鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』の伝ふるとこ

ろに由れば，建保四年夏，東大寺大仏再建の功労者・宋人陳和卿が，『当将軍家に於いては，権化の再誕なり，恩顔を拝せむが為めに参上を企つる』旨を申立てて，鎌倉に参着，六月十五日，実朝に対面，三反奉拝，頗ぶる涕泣して，

『和卿申して云く，貴客は，昔，宋朝医王山の長老，時に吾れ其の門弟に列すと云々。此の事，去ぬる建暦元年六月三日丑剋に，将軍家御寝の際に，高僧一人御夢中に入って，此の趣を告げ奉る。而して御夢想の事，敢へて以て御詞に出されざるの処，六ケ年に及び，忽ち以て和卿が申状に符合。仍って御信仰の外他事無しと云々』（原変体漢文）

といふことになって，実朝は側近諸人の反対を押切って，渡宋の志を立て，そのための造船を和卿に命じたのであった。

実朝は，勿論，『肉体の系図』から言へば，頼朝と政子の子であるが，その歌集『金槐集』の数々の絶唱に示されて居る，悲劇的人生観に裏付けらるる至純の詩魂は，決して，幕政六百年の創始者・頼朝や，北条氏一族専制のために威を振った尼将軍・政子とは，異なった『霊魂の系図』に属するものであることは明白であり，実朝の渡宋の企てと，これにまつはる『再生』の説話とは，その一証左と言ふことが出来よう。

十九世紀の西欧にあって，“Concord の哲” Emerson と並んで，“Chelsea の賢” と称せられ，当時英米の思想界が，その一世を風動せしむる預言者的風格を等しく仰いだ，輝やける大いなる双つの星・Thomas Carlyle (1795—1881) は，その単行本として世に送った最初の文芸作品・Goethe の *Wilhelm Meister* の英訳（1824年刊）に添へた Goethe 論の中に，Goethe の各作品を紹介批評するうち，その史劇の一つ *Götz von Berlichingen* について，

『ドイツ国そのものにあって，*Götz* は，現在においてこそ，ただひとり，後嗣ぎもなく，孤影悄然たるものがあるが，当時にあっては，無数の騎士道劇や封建時代の物語，さては詩的・好古的作品の数々を生みいだす母胎となったのであって，たとへそれらは既に早くこの世から消え去り忘れ去られてしまったとはいへ，当時の世には，随分騒がれもし持てはやされもしたのである。

一方，わがイギリス国においては，*Götz* の影響は，恐らく更に一層顕著なるものがあって，それが今日にまでも及んで居る。Sir Walter Scott の文学方面における最初の事業は，*Götz von Berlichingen* の英訳であったのであり，もし仮りに，天才と

いふものが，知識教育同様に，伝達可能のものであったとすれば，Goethe のこの作品こそ，Scott の名作 *Marmion* や *Lady of the Lake* の如き史詩，及び，これに続く幾多の歴史小説一切の創作の，生みの親とも呼ぶことが出来るであらう。

まことに，最適の地に落ちた一粒の種子であった！ それは，他のどの樹木にも立ちまさって，確固として麗はしく，とまでは行かずとも，一層たけ高く，また幅広く生ひ立ったのである。そして現在もなほ，年ごとに，全世界の諸国民が，ひとしくこぞって，その果実を収穫しつつあるのである』

と言って，Goethe の *Götz* にさかのぼる，Scott の諸篇の "spiritual genealogies (精神的系譜)" を指摘して居る。事実，Scott は，ドイツ国に渡って親しく Goethe を往訪したい志願を抱いて居たが，たまたま，Goethe の死によって，その願ひは果されずに終ったのである。まことに，『国を異にすと雖も，心は断金に在り』といふ慧慈法師の詞を想ひ起さずには居られない。

以下，副島種臣の『霊魂の系図』と，Thomas Carlyle の "spiritual genealogies" と，両語の意味するところに導かれて，西欧各国の思想交流を，Carlyle を中心として，少しく検索し，それら諸家の，明治以来わが国における受容の在り方と，その受容を可能ならしめた我が民族の伝統的思想的性格とに触れつつ，世界史上『日本の世紀』と呼ばるる現在及び未来において，確立せる『世界文化単位』としての我が国の果すべき，人道的使命を考へて見ようとするのである。

## 2. Goethe と Carlyle

Scott の，文学者としての出発が，Goethe の *Götz von Berlichingen* の英訳 (1799刊) であったやうに，Carlyle もまた，思想家としての第一歩を，Goethe の *Wilhelm Meister* の英訳から出発した。この両著の間，約二十五年のへだたりがあるが，Carlyle の出生が 1795年であるから，Scott が二十八歳にして Goethe の詩的・戯曲的活動の流れに棹さしたに対して，Carlyle は二十九歳にして Goethe の思想的・哲学的精神に生涯の指針を仰いだのである。

Goethe と Carlyle と，両者の関係を最も端的に示して居るのは，1824年から1831年に至る約八年間に両者の間に交換された四十通ほどの往復書翰であっ

て，それらは，Charles Eliot Norton の編集した *Correspondence between Goethe and Carlyle* (1887年刊) に見ることが出来る。その最初のものは，Carlyle が Goethe 宛にLondon から発した，1824年6月24日附のものであって，この時，Carlyle は二十九歳の青年であり，Goethe は既に七十五歳の老境に達して居た。

この書簡は，同年Edinburgh から三冊物として発行された，*Wilhelm Meisters Lehrjahre* の英訳本に添へて，訳者の Carlyle が原著者の Goethe に送ったものであるが，その中で Carlyle は言って居る——

『高著の此の不完全な写しなどは，とても御一読の栄に浴し得るものとは存じませぬが，私が渇仰してやまぬ知性と心情との持主で居られる貴下の御生涯と，私の生涯の幾らかの部分とが，かかはりを持ったと考へますだけでも，うれしいのでございます。四年前，私の生れ故郷の Scotland の山の中で，高著 *Faust* を読んで，いつかは親しくお目にかかり，胸中万斛の苦悩と，千千涌く疑惑憂悶の思ひとを，あたかも父の御前におけるがごとく，願はくは，貴下の御前に告白吐露し得む日のあれかしと，ひそかに私は空想いたしました。それほどに限もなく，わが胸の底ひの思ひを悟り知り尽して居らるるかに思はれ，又それほどに美しく，それらの思ひを表現し尽す力を持って居られました。はじめて高著に接して以来，私の文学聖徒名簿からは，幾多の聖徒名が消されて行きましたが，貴下のお名前のみは，なほそこに，その輝やきをいや増して居るのでございます』

と。これに対し，Goethe は，感謝の返書を送り，同時に，Carlyle の妻 Jane Welsh に頸飾りの贈物をした。この老文豪の心の籠った応答に対し，若き Carlyle 夫妻が，いかに感激したかは，容易に想像し得られるところであって，約八年の後，Goethe の没後，1833年8月26日，Emerson が，遙るばる大西洋を越えて，Carlyle 夫妻を Craigenputtock に訪れた時にも，Welsh 夫人は，この Goethe の最初の贈物を頸にかけて，『これが来た時は，躍り上るばかりに嬉しかったが，その後も，いろいろのものを沢山贈って頂いた』と Emerson に語ったことが，Emerson の当日の日記に記されて居る。

そして，1827年4月15日，Edinburgh からの，Carlyle の第二信には——

『私にとって，貴下のお手紙と御贈物とは，実に，まだ直接お会ひしたことは無けれども，そのお声は遠く海を越えて，私が絶望の深淵にのたうちまはって居た時に温かい

忠言と助力とをお与へ下さった，そのお声の主の，有りがたいお形見なのでございます。と申しますわけは，もし私が，闇黒から救はれて，些かでも光明に浴する身となったと致しますれば，又もし私が，自分自身と自分の責務と，並びに自分の進路とについて，些かたりとも知るところありと致しますれば，それは正に，他のいかなる事情によるよりも，数ある貴下の御著作を研鑽致しましたお蔭なのでございます。貴下こそ，他の如何なる人にもまして，当然，私が，師匠を仰ぐ弟子の思ひを以て，否，たましひの父を慕うてやまぬ子の心を以て，いつもいつも感謝し尊敬せねばならぬ善知識におはしますのです。これは決して，何の役にも立たぬお世辞ではなく，真実，心からなる真事（マコト）でございます』

と極言し，Goethe を "spiritual Father"（たましひの父）とまで呼んで居る。実に，Carlyle は，その精神的自伝 *Sartor Resartus*（仕立て直された仕立屋）の中でつぶさに叙述した "Everlasting No"（永遠なる否定）の闇黒の底ひから "Everlasting Yea"（永遠なる肯定）の光明世界への転回に当り，その "たましひの父" Goethe の開導に触れて，ここに彼の生涯を貫く思想的基盤が形成せられたことは，疑ひを容れない。

そして，この交情は，Goethe が1832年この世を去るに至るまで，些かも変ることはなかった。Goethe 死没の前年，1831年の6月10日に Scotland の旧居 Craigenputtock からの Carlyle の書信には，Goethe 八十二歳の誕辰を祝して，十五人の同志——その中には，Wordsworth, Southey, Procter 等の詩人，文人の名も見られる——連署して，賀詞を呈したことが記されて居る——

『……この私共の静かな，人跡無き処に在っては，現実の世は余りにも目にふれず，従って，それだけ記憶と空想とが旺盛に働いて，Weimar は遠く隔たることなく，近く且つ親しく，いはば心のふるさとでございます。日ごと日ごと私はそこに愛情こめし祈りをささげずには居れません。日ごと日ごと私は，この生ける誰にもまして深い御恩ある，そして一つ心に生くる御方をおもひ，且つ最もしばしば口に出して言はずには居られません。と申しますわけは，このよき人にこそ私は，擾乱混沌の今の世にもなお，敬ひ尊ぶ心は可能であり，まこと，共に凡夫として生くる人間に対して，いと高きものの真実なる表象として，これを敬ひ尊ぶことが可能であるといふ，この何にもまして貴き知識と経験とを負ふて居るのだといふことを，私は忘れむとしても決して忘れ得ないからでございます。疑惑の闇の中にさまよひ惑へる幾多の人の心に，そのやうないのちを与ふる光明を，貴下は，従来も運びこまれましたし，また将来もなほ運びこまれるでありませう。そして遂に，幾世代の人人がことごとく，いたづら

に摸索し否定することなく，再び信じ且つ知るを得しことを，貴下に，当然，感謝するに至るでせう。ここにこそ，真実，全く争ひ難き正統の宗主権が存するのであって，この主権にまつらふことが私共の唯一無二の自由なのでございます。……あのLondon の都に，ささやかながら，一の親独義団とも称すべき詩人の集りが形成せられつつあり，貴下がその中心となって居られます。その集団の最初の公共的行動が，近く迫る貴下の誕辰を期して，Weimar の地に顕現する筈でございます。……かかる企てが私共の間において可能となったといふ，ただそれだけの事さへも，数年前には，思ひもよらぬ不思議な事であったでせう。そして，これは，貴下が予てより『世界文学』と名付けて来られたものが，さほど遠くないかも知れない，といふことの多くの証拠の一つとなりませう。……』

これに対して，Goethe は "Den Fünfzehen Englischen Freunden"（十五人のイギリスの友らに）と題する，次の詩を贈った——

| | |
|---|---|
| "Worte die der Dichter spricht, | （詩人の語る言葉は， |
| Treu in heimischen Bezirken, | 故国の国内にあってこそ |
| Wirken gleich, doch weis er nicht | まことに且つ速く働けども， |
| Ob sie in die Ferne wirken. | 彼は知らず，遙かなる国にては |
| | 働くや否やを。 |
| Britten ! habt sie aufgefasst! | ブリトンよ！ 君らはよくぞ掴んだ！ |
| 'Thätigen Sinn! das Thun gezügelt; | 「心は鋭く！ 行ひは控へ目に。 |
| Stetig Streben, ohne Hast.' | 弛まず努めよ，急ぐことなく。」 |
| Und so wollt Ihr es besiegelt." | かくて君らはその証しされむを欲するのだ） |

この詩は，1831年8月19日に Weimar から発送されたが，同じ8月13日の London からの Carlyle の書信には——

『私たちの最後の二通の手紙は，Rotterdam 辺りで，互ひに行違ったに違ひありません。……私共のことを想ひ起して下さって，深謝申しあげます。未だ曾つて，これほど嬉しく，書信を手にしたことはございません。お手紙は，和やかな夏の夕暮に，到着いたしました。そして，それ自身，まさに夏の宵のごとく，和やかで清らかで，やさしい日の光と，すでに永遠の曙のかがやきが，照りとほって居りました！ 限りなき感謝を，私は貴下に負うて居ります。と申しますわけは，貴下によってこそ，私は，同胞としての人間にとって，どれほどの価値が人間に在るものかを，学び得たからでございます。また，いはゆる "open secret"（公開の秘密）は，よしや大多数の

者の眼には見えずとも，眼ある者には，依然，公開されて居るといふことを，学び得たからでございます。……Scotland の荒野に帰りましたら，またお便り申しあげます。それまでのところ，私と吾妹とが貴下を思ひ，貴下を愛して居るものと覚し召し下さい。特にあの28日のお誕生日には，愛する心の感じ得る限りの熱き祈りをささげて居りますものと，覚し召し下さいませ。』

と，終始一貫，変ること無き感謝と愛敬の限りを告白して居る。まことに，『国を異にすと雖も，心は断金に在り』と言ふべき，美しきたましひの結び，交はりと言はねばなるまい。

## 3. Mazzini と Carlyle

イタリアが，統一し独立した近代国家となったのは，極めて新しいことであって，それは，わが明治維新に先立つこと僅かに八年の事であった。それまでの国情について，黒田正利氏は，その『イタリア研究』(昭和18年刊) に収められてある『われ祖国を求む——イタリア愛国文学に現れたる愛国精神——』の一章の中に，次のごとく叙述して居る——

『世界に文化の道を通じたローマ，中世紀暗黒時代に信仰と希望と慈悲の光を以って世界を照らしたイタリア，そして「文化の母」と敬慕されて世界の新文化を育くんで来た文芸復興のイタリアが，何うであらう。国家としては，地方的コムネに分散割拠し，外蛮の侵入に震盪され，イスパニアの支配権の前に膝を屈したばかりか，イタリアは，国民的良心さへも売ったことがあった。アウストリアの苛酷なる笞の下に喘ぎ，フランスの命令に従ったばかりか，イタリア人に何等関係の無い戦争のために国民の聖血を徒らに捨てなくてはならなかった。……かつてメッテルニヒがイタリアを評して「イタリアとは地理的名称に過ぎない」と放言したことは，今日のイタリアに取っては，無論，不合理極まる失言である。しかし，当時よくこれを反撥し得た事実と人物と良心があったであらうか。クローチェ氏が，「イタリア史は実に1860年，即ち，イタリア国家独立の年を以って始まる」と言ってゐるのも，半面の真理を表はしてゐる。充足せる国家的行動は，イタリアの再起——リソルジメント——からであるといふべきであらう』

と。このイタリアの再起——リソルジメント——の中心，近代イタリアの統一と独立の政治的運動に挺身すると共に，その精神的指導者となった者が，Giuseppe Mazzini (1805—1872) である。彼は，十六歳の少年として，その生地ゼ

ノヴァの街上において，ピエモンテの蜂起に敗れたイタリアの亡命者の姿に接し，『自己の魂に愕然として直面』して，『祖国の自由のために考へ，またそのために戦はねばならぬ』と決意し，愛国的秘密結社 Carbonari 党の一員となってより，その全身心の精力を，祖国イタリアの統一と独立の一途に献げつくした。彼は，その代表的著作『人間の義務について』の第一章『イタリア労働者に告ぐ』の冒頭に——

『私は，諸君の義務について語りたい。われらの知れる限りのうち最も聖なるもの，即ち，神・人類・祖国・家庭等について，私は，己が心の命ずるまにまに，諸君に語りたいと思ふ。私は愛を以て諸君に語らうと思ふから，諸君も愛を以て私の言葉を聞いてもらひたい。私の言葉は，私の永年の苦悩と観察と研究とから鍛へ成された確信に発するものであり，私は，生ある限り，ここで諸君に示す義務を，力の限り果す決意である。私は間違ふかも知れぬが，それは心から出たことではなく，私は自分を欺くことはあっても，諸君を欺くことは出来ない。だから，諸君は私の言ふことを友人として聞いてほしいのである』

と，語りかけて居る。この「確信」を，彼は，わが二十一回猛士のそれにも比すべき決死の勇を以て，叫び且つ実行して変ることがなかった。1830年，反乱罪の廉を以て捕はれ，翌年，外国追放を選んでフランスに渡り，「青年イタリア」党を組織したが，一年後にはフランス政府から国外退去の命を受けてスウイスに移り，或はピエモンテに蜂起を策して敗れ，或はスウィスよりイタリアへの遠征を企てて成らず，広く「青年エウロパ」党を起して，各国共和制同志と結んで策動したが，1836年，遂にスウィスからも追放せられ，翌年 London に到着，爾来イギリスに身を寄すること十余年，この間に Carlyle との親交も成立し，1943年には『Thomas Carlyle の全著作の真髄と傾向について』及び『Carlyle のフランス革命史について』の二篇の論文を草して，Carlyle の長所短所を忌憚なく論評した。この第一論の中で，彼は Carlyle を評して——

彼 (Carlyle) は，憂ひに満ち，沈重である。即ち，彼は早くより，現代世界を喰ひ荒す禍悪の根源に触れ，その文筆生活の最初より，声を極め，勇敢に，これを告発した。……彼の全著作を通じ，その論ずる主題の何たるを問はず，彼は，社会問題の諸相の何れかに触れて居る。芸術は，彼にとって一の手段たるに過ぎず，その文筆家としての天職において，彼は，人民保護の使徒たる役目を果して居るのであって，この

点においてこそ，われわれは，彼を判断しなければならない。……Carlyle 氏の物の見方と，私自身のそれとの間には，種々の差違があることは，予め断って置かねばならぬが，これをあげつらうに当って，先づ最初に，彼の有する，争ふべからざる長所を認めずには置かれないのである。即ち，その長所たるや，現代にあって，極めて稀れであると共に，また極めて重要のものであり，しかも，彼において，それらは，彼と異なる旗の下に立つ人々さへも尊敬と讃嘆をささげずには居られない程に卓越したものであって，まして，私自身の如く，大体において同一の側に立ち，単に採るべき手段と路筋との選択についてのみ意見を異にするに過ぎぬ者は，同情と感謝を禁じ得ないものなのである』

と言って，Carlyle の長所の第一として，"sincerity"（まごころ）を挙げるのである。"What he writes, he not only thinks, but feels"（彼が書く言葉は，単に頭で考へて居るばかりでなく，心に実感して居るのである）"He may deceive himhelf——he cannot deceive us"（彼は，自己を欺くことはあるかもしれぬが，われわれを欺くことは有り得ない）"His motive is the love of his fellow-men, a deep and active feeling of duty, for he believes this to be the mission of man upon earth"（彼の動機は，共にこの世に生くる人間としての同胞愛，深く且つ積極的の義務感なのであって，彼はこれをこそ，この世に生くる人間の使命であると信じて居る）——これらの言葉は，Mazzini が，その人生観の根本において，Carlyle と共感共鳴の立場にあることの告白であって，その sincerity（まごころ——やむにやまれぬ人間の至情）を挙げて Carlyle を評するところ，Carlyle が詩人 Burns を評するに，先づ Sincerity を第一に挙げ，"He does not write from hearsay, but from sight and experience ;.....he speaks forth what is in him, not from any outward call of vanity or interest, but because his heart is too full to be silent"（彼は，他人からの又聞きをもととせず，自ら目に見，身に感じたところを本として書いて居る……彼は，何ら外部からの虚栄心や利己心に動かされてではなく，万感胸に溢れて黙止し得ぬが故にこそ，心のたけを言ひ出づるのである）と言って居るのと，全く軌を一にして居る。

うべなるかな！ 1844年，イギリス政府がアウストリアのために，Mazzini の手簡を開封して，その内容を通報し，政府要人の口より Mazzini の人格を傷つくる誹謗の言の発せらるるや，Carlyle は，決然，筆を執って The *Times*

(1844年6月15日) 紙上に寄書し，次の如く証言した——

『私は，累年，Mazzini 氏と辱知の間がらであるが，たとへ彼の実際的洞察力と俗務処理能力とに関して私が何と思ふにしても，彼の人格に関しては，彼はまさしく天才と徳行の人であり，天真にして欺くことを知らず，人情に厚く，心気高き人であり，実に，殉道の人と称するに足る，今世稀有の人物の一人であって，その殉道の人といふ名の意味するところのものを，黙々，日日の生活において，真摯に理解し且つ実行しつつある人に間違いないことを，私は，すべての人々に対し，飽くまでも自由に，証言することが出来る』

と。まことに，『国を異にすと雖も，心は断金に在り』といふ実例の一つを，ここにも示さるる思がする。

かくて，多くの理解者を得たMazziniは，その失意の晩年を，1872年，Pisaに客死し八万人の送葬者に送られて，とはの奥都城にやすらうに至る前年まで，Londonで過した。その間，1864年には，イギリスの労働組合及びKarl Marxら一部の社会主義者と協力して，所謂第一インタナショナルを結成したが，その組織の主動力がMarxの手に握らるるを見て，『彼はドイツ人であって，プルドンの如くに尖鋭な，しかし破壊的な精神の所有者であり，飽くまでも我の強い気性で，他人の勢力は我慢がならぬのだ。哲学的真理にも宗教的真理にも深信なく，彼の心には慈愛よりも憎悪がまさって居るのではないかと危ぶまれる。かなしみいつくしむ心より，人を憎みのろふ心がまさって居ることは，たとへその憎しみにその由って来る根本があるとしても，正しいことではない』と言って，袂を分かったことを附記して置かう。

## 4. Emerson と Carlyle

Goetheが，八十三歳を以てWeimarに没した翌年，MazziniのLondon亡命に先立つこと五年，1833年の夏八月，Mazziniより二つ年上の一アメリカ青年が，前年12月25日，新大陸の東海岸Boston港を出帆し，遙かに海を渡って欧州を訪れ，イタリア・スウィス・フランスを経てイギリスに入り，Scotland南部の州都Dumfriesから16哩も離れて『荒涼たる灌木に蔽はれ四辺寂として誰一人住む者も無い』Craigenputtockの一つ家に，わざわざ馬車を雇うて

Carlyle に会ひに来た。二人は，一見十年の知己の如く，一日一夜を心ゆくまでに思のたけを語りつくして袂を分かった。このアメリカ青年は，誰あらう，これより満四年の後，1837年8月31日，Harvard 大学の Phi Beta Kappa Society の席上，"Man Thinking, or the American Scholar"（思索する人間，別名，アメリカの学者）の講演を行なって，場外に溢れて窓の外から眼を輝やかせてのぞき込み，満堂固唾を呑む聴衆に，魂の底まで震撼した感激を与へ，アメリカの知識人をして，これこそ『アメリカ文学史上未だ比類なき出来事』（James Russell Lowell）と呼び，『アメリカの思想的独立宣言』（Oliver Wendell Holmes）と叫ばしめた Ralph Waldo Emerson (1803—1882) その人であった。

Emerson は，Carlyle と初めて会ひ語ったその日の日記に，『自分の一生での芽出たい日』と呼び，Carlyle 夫妻の印象を，『唯一人の話相手の夫人は，仲々教養も深く，愛想のよい人で，真理と平和と信仰が，この夫妻と同居して居て，どれほど彼らを美しくしているか知れない。自分は，彼の顔ほど，心の優しさを現はした顔を見たことがない』と記し，Carlyle もまた，この初対面の Emerson の印象を，その訪問の二日後に，自分の母親に宛てた手紙の中で，『勿論，私共は，彼を歓迎するよりほかはありませんでした。殊に，彼は彼自身において，本来，私共がこれまでに対面した人々のうち，最も愛すべき人の一人と思はれましたから，尚更でした。……彼は，合衆国 Boston の出身で，名を Emerson と言ひ，そのイギリス，フランス，イタリアの遍歴から，遠路遙遙当地までわざわざ私に会ふために脇路をしてくれたのです。……彼は，一晩泊って翌日まで，私共の家に居て，心のゆくまで自分も語り，また私共の語るのを聞いてくれましたので，彼と別れるのが，本当につらく悲しい思でした』と書き送って居る。また，Jane Welsh 夫人も，ずっと後年になって，この日の記憶を振返って，『私は，あの日の訪問者を決して忘れることはないでせう。沙漠の中に住んで居た遠い昔，まるで，雲の中からこの地上に降りて来たかのやうに，私たちを訪れ，その一日を，私たちにとって，夢に夢見る心地をさせて，さてそれが，たった一日だったことを泣きに泣く，私たちを置いて，去って行ってしまはれたのです』と書いて居る。

かくして始まった Emerson と Carlyle の交情は，Emerson 三十一歳，Carlyle 三十九歳の，無名の青年時代より，Carlyle が八十五歳，Emerson が七十九歳の寿を保って，中一年をへだてて相ついで没した，盛名赫々たる老年時代まで，毫も変るところなく，継続した。その間，両者の間に交換された，1834年から1872年に至る三十有九年に亘る百七十三通の往復書簡が，Charles Eliot Norton の手によって，*The Correspondence of Thomas Carlyle and Ralph Waldo Emerson* 上下二巻の書に編まれて居る。以下，少しく，その内容をのぞいて見よう。

Emerson は，その最初の欧州旅行から，1833年10月9日，New York 上陸，帰米したが，翌1834年5月14日附，Carlyle に宛てて，Boston から，その最初の手紙を送った。その中に曰く——

『恐らく二年前のことであったと思ふが，どうした名声の風の吹きまはしか，君の名が，一連の論文の著者として，僕のもとに吹き送られて来た。そして，それらの論文こそ，イギリスの新聞雑誌界に現はれる大量の評論中にあって，抜きんじて遙かに当代第一の，独創的且つ深淵なる立言と，僕は夙に見破って居た（また実際，それは極めて容易に出来ることだったのだが）——即ち，これら一連の作品の著者は，学者であると同時に，信仰の人であり，学問的であると共に，敢へて風狂に遊ぶを辞せず，あの，絶望し嘲笑する哲人たちの仲間に属しながら，しかも，敢へて希望を捨てず，誠心誠意，衷情を吐露することを恥ぢぬ人物であることを見破って居た。……だからして，僕は，訪欧の途次，君の家へ行ったのだ，ただ，「気を落すな。君の立言は，よし，地球の果てではあっても，また，最も世に知られぬ無名の人々にではあっても，確かにこれを聞いて居る人があるのだ。それは，必ず活きて働らき，世を動かすものなのだ」と告げるために。わが恩師たちの一人に対する強い敬意に引かれて，僕は，その人を親しくこの目で見，彼が言ふであらうところの，彼の Craigenputtock における「環境」に親しく接するために，僕は出かけて行ったのだ』

と。Emerson は，十歳年上であった Carlyle に対して，“one of my teachers”（わが恩師たちの一人）と呼んで，“strong regard“（強い敬意）を以て兄事して居ることがわかる。

この書簡に対する Carlyle の返書は，同じ1834年の8月12日附，London 市 Chelsea の寓居からの発信となって居る。その中に曰く——

『二週間ほど前に，僕は，君の有りがたい贈物を，Frazer から受取りました。嬉し

いと言っただけでは，仲々ことばが足りません。それは，遙かに万里の波濤を越えて，新大陸全体の実在を，——そして，僕もまた，その新大陸に，果すべき役割と宿命を有するものだといふことを——はじめて，はっきりと，私のために告げ知らせてくれる，愛情に溢れた知音の声ではありませんか！ 「ここかしこに，自分たちを思ひ，自分たちを愛してくれて居る人が居るのだと，思ふことが出来るとき，その時はじめて，味気なき，この現し世も，賑はしき，楽しき花園と化するのだ。」Nithsdale の僕らの庵りを訪れてくれたと，僕が想起し得る人々の姿の中で，——それらは，皆，今では，この世のものとも思はれず，或は天国からの妙音を伝へ，或は地獄の業風をもたらす，幽界の使者さながらと思はれますが——恐らくは，君ほどに，疑ひもなく天界から舞ひ降りて来たもののやうに思はれたものは，一人もないのです。それほどに清らかで，それほどに静かで，それほどに温かい慈悲心に満ち溢れて居ました。しかも，やがて，幽界の使者の当然の姿として，あのやうに，余りにも忽ちに，紺碧の虚空の中に消え失せてしまったのです！ 僕のメモ帳の中の，君の住所氏名を見るたびに，僕は，慕はしく懐かしい思に堪へません。この，無限の宇宙の中にあって，そこになほ，君が僕を固守して居てくれるのだと知って，僕が喜ぶかどうか，思っても見て下さい。……君は，*Teufelsdröckh* が有りがたいと，僕に礼を言う。僕こそ，君が，余り大げさ過ぎるとは思ふが，まごころから，偽りならず，あの著書を認知して下さったことに対し，君にお礼を言はなければならんのだ！ 冷遇と愚鈍と反対論のただ中にあって，*Euge*（天晴れ）！ と，われらに宣言してくれる声は，有りがたきかな！』

と。Carlyle 一流の，熱情ほとばしる筆致を以て，知己に対する感激と感謝を綴って居る。

Emerson が二度目に欧州を訪れ，今度は各地で講演して回り，Carlyle とも行を共にしたのが，1847年，その翌年を境にして，二人の間の交信は，それまで，少なくとも年五通か六通，多い時は十数通に上ったものが，それ以後は，1870年度の十通を除き，例年，二三通に減少し，Emerson の三度目の，そして最後の渡欧を見た1872年以後は，全く音信が途絶えた。しかし，両者相互の信頼は変らず，1850年7月19日の Carlyle からの手紙に，『まる一年，音沙汰なし……よい折のあり次第，お便りを下さい。そして，この世の中に，まだ，断金の心の友が生きて居ると，知らせて下さい』と言ひ，1854年の，同じく Carlyle からの書簡にも，『随分永い間，音沙汰なしの挙句，やっとまた，君からの一言！……これまで度々言って来たことだが，本来，僕にとって完全に

人間的であり，且つ僕の言ふことを全部，充分に理解し，そして，明瞭な同情と直覚を以て，僕に答へてくれる声は，この世に唯一つ，君の声を措いて，ほかには断じて無いのだ，といふことは，今も変らず，直実であり，将来も変らず，その通りであるだらう』と書いて居る。

Emerson もまた，その死の直前，『その書斎にあって，思想の連絡も，しばしば途切れ，日常見慣れた物にも判然と識別が困難であったが，しかし，たまたま，壁上に掲げありし Carlyle の肖像に目がとまった時，にっこりと，愛情溢るる笑みを浮かべて，「あれこそ，その人だ。私の，無二の人なのだ」と洩らした』と伝へられて居る。

ああ，『国を異にすと雖も，心は断金に在り』の一句，よく，この相慕ふてやまなかった二個の魂の関係を，要約し得るものと言へよう。

## 5. むすび

『万葉集』巻五に，上代における思想戦の一例として有名なる，山上憶良の『令反惑情歌』一首幷びに序が載って居る。その歌のはじめに——

『父母乎。美礼婆多布斗斯。妻子美礼婆。米具斯宇都久志。余能奈迦波。加久叙許等和理。母智騰利乃。可可良波志母与。由久弊斯良祢婆。』（ちちははを見れば尊とし。めこ見れば恵し愛くし。世の中はかくぞことわり。もち鳥のかからはしもよ。行方知らねば）

とあるが，この人情の自然に随順するのが，日本古来の国風なのである。同じ『万葉集』巻十八にも，大伴家持の『教喩史生尾張少咋歌』一首幷びに短歌四首があって，その初めにも——

『於保奈牟知。須久奈比古奈野。神代欲里。伊比都芸家良之。父母乎。見波多布刀久。妻子見波。可奈之久米具之。宇都世美能。余乃許等和利止。可久佐末尓伊比家流物能乎』（大己貴，少彦名の神代より言継ぎけらし。父母を見れば尊く，妻子見れば愛しくめぐし。うつせみの世のことわりと。かくさまに言ひけるものを）

とあって，これは，神代の昔よりの我が民族的伝統として，言ひ伝へられて来たことがわかる。憶良も家持も，この伝統的国風をまもり，思想と生活の乱れを正さうとして，筆を執ったのである。

この神ながらなる民族心は，やがて，大陸文化の伝来に対しても，批判的摂取の作用を示して，儒教の数ある経典の中にも，『孝経』を『群経の宗』として選択した。即ち，奈良時代，孝謙天皇の天平宝字元年4月4日の詔に——

『古者，治民安国，必以孝理。百行之本，莫先於玆。宜令天下，家蔵孝経一本，精勤誦習，倍加教授。』（いにしへ，民を治め国を安んずるに，必ず孝を以てをさむ。百行の本，これより先なるは莫し。宜しく天下をして，家ごとに孝経一本を蔵し，精勤誦習，ますます教授を加へしむべし）

と言ひ，また，平安時代，清和天皇の貞観2年10月16日の制にも——

『哲王之訓，以孝為基。夫子之言，窮性尽理。即知，一巻孝経，十八篇章，六籍之根源，百王之模範也。』（哲王のをしへは，孝を以て基となす。夫子の言は，性を窮め理を尽す。即ち知る，一巻の孝経，十八篇章は，六籍の根源，百王の模範なることを）

とあって，淳和天皇以後，今日に至るまで，千有余年，わが東宮の御講書は，必ず『孝経』より始むる習はしとなり，以て『天朝の御学風』が，神代以来のわが民族的伝統の上に確固として継承されて居ることを示して居る。

民間にあっても，鎌倉将軍の書を講ずるや，また『孝経』より始むる習はしであったことが，『吾妻鏡』の記事に見られ，江戸時代に及んでも，仕へを辞して一生を『畎畝之一匹夫』として終へた，中江藤樹の如き，永く後世に『近江聖人』の名をとどめたが，その著『翁問答』に，『五倫の道，孝行の条目にして，孝は人極の第一義』と説き『畢竟，五経皆孝行のをしへなるを知るべし』と訓へて居る。更に曰く——

『文字を目に見覚ゆる事はならざれども，聖人の本意をよく得心して，わが心の鏡とするを，心にて心を読むと申し候て，真実の読書なり。心の会得なく，只目にて文字を見覚ゆるばかりなるをば，眼にて文字をよむと申して，真実の読書にはあらず。我まなこにて書物をよむ事ならざれども，聖経賢伝をふかく信仰して，読み覚えたる人に講釈させ，その本意をよく得心して，我心もち身の行ひの鏡とする故，俗学の書物をよみ申すより，一きは勝りたる書物よみにて候へば，賤男賤女も，書物を読まずして読むにて候。今時はやる俗学は，書物を読みて読まざるにて候』

と。かくて，『天朝の御学風』は，目に一丁字なき賤の男，賤の女にも，『心にて心をよむ』心学として受け行なはれ，ここに，『皇朝風俗，忠厚義烈。家家

太伯，人人伯夷』（皇朝の風俗，忠厚義烈にして，家家太伯，人人伯夷たり）と，紀維貞が『国基』に説くが如き，国民的風俗が成立し，明治天皇の——

『我カ臣民，克ク忠ニ克ク孝ニ，億兆心ヲ一ニシテ，世々厥ノ美ヲ済セルハ，此レ我カ国体ノ精華ニシテ，教育ノ淵源，亦実ニ此ニ存ス。』

と宣らせらるる『教育勅語』に結晶して，わが国民教育の不易の指針となったのである。

第二次世界大戦後，東西に引裂かれた西ドイツの首相として十余年，その復興の陣頭に立ったAdenauer老宰相は，その民間選出の七十名の復興委員の答申に基づき，ドイツ再建の基本精神として，この明治教育の原典『教育勅語』を採用し，みづから自室の壁上に，これをそのドイツ語訳と共に掲ぐると同時に，全ドイツの学校に掲げしめ，以てドイツ再興教育の源泉たらしめたのであったが，特に『父母ニ孝ニ』と『一旦緩急アレハ，義勇公ニ奉シ』の二句を太文字に印刷して，その意味の重きことを知らしめた。

Mazziniは，『人間の義務について』の中の『家庭に対する義務』の章に——

『家庭において，愛情は喬木にまつはる蔦の如く，不知不識の間，徐々に，根づよく絶え間なく，諸君のまはりにひろがり，いつも諸君の後からついてくるし，黙って諸君の生活と融け合ってしまふ。諸君と余りに一体化して居るため，諸君はよくこれに気づかないことがあるが，一旦これを失ふとき，何かわからないが，諸君の生活に親しく，無くてはならぬものが不足して居るやうな気持で，諸君はイライラして落着かずにうろうろする。それでも，束の間の快楽や慰安は得られようが，あの湖水の面のやうな静けさや，母の胸に眠る幼児の信頼しきった眠りの安らかさのやうな，この上ない慰さめは得られない。……母から受けた最初の頬ずりが幼な子に愛を教へ，恋人から受けた最初の清らかな接吻が，男性に人生の希望と信念を教へる。そして，愛と信念とは，向上の欲求と，一歩一歩未来に近づく力を造り出す。未来の活きた表徴は幼な子であって，それは我らと未来の時代をつなぐきづなである。家庭は，その繁殖の神秘と共に，女性によって永遠をさし示す。だから諸君は，家庭を神聖なものとし，生活と不可分離の条件として，飽くまで，無思慮の人たちが起す改変から守って行かねばならないのである。家庭は神慮によるものであって，人間の計らひに基づいては居ない。家庭は生活の要素であり，人類の揺籃であって，人間の存する限り続くであらう。』

と教へて居る。これは，わが神代の，オホナモチ，スクナヒコナの神のコトダ

テの，西欧的・近代的解説とも受取れよう。明治天皇の御製に——

家
親も子もしたしみかはし家の内のにぎはへるこそよはたのしけれ
楽
千万の民と共にもたのしむにます楽はあらじとぞおもふ

と拝誦せらるるが，『国』を『家』となす我が国体の，天壌無窮の根源の存するところを思はしめられる。

この，人情の自然に随順する，日本民族の伝統的性格は，今日においても，その根底において，堅持せられて毫も変ることはない。明治以来，西欧の文物の洪水の如き奔流の中にあって，その取捨選択の対象をあやまつことなく，明治・大正・昭和の三代に亘る，我が英学界在野の巨星，斎藤秀三郎は，その『英語ヲ完全に活用スルノ士ヲ養成スル』目的を以て自から創立した正則英語学校において，終生，Carlyle 及び Emerson を講じて倦むことを知らず，同じく三代に亘り，野に叫ぶ声として，時代の俗流に抗し，一向直進，『祖国礼拝』と『御集拝誦』の同朋協力の信のために戦ひたふれた，思想界在野の先覚，三井甲之は，『Goethe の後に Wundt』と称へ，詩人 Goethe の芸術と，碩学 Wilhelm Wundt の学術を究めて，偽新思想撃攘の永久思想戦を宣して，これに献身した。第一次世界大戦の経緯に関し，『真の戦争について』の一文を著作し，ドイツの真の理解者として Carlyle を回顧し，イギリス国内の圧倒的世論の流れに抗して『最初より断然この戦争に反対の声をあげたであったらう』ただ一人のイギリス人を痛惜したのは，この Wundt であった。

これら，明治以来の我が国における，学術・言論・思想界の『霊魂の系図』に関しては，更に詳論を要するところであるが，既に以上の，甚だ意に満たぬ略説さへ，所定の紙数を越えて居るので，今回は，この暗示的，二三の素描にとどめて，この小試論を擱筆する。（昭和48年8月21日）

# Concerning "Spiritual Genealogies"

Matsuda-Fukumatau

## Résumé

There are certain *Wahlverwandtschaften* among men as well as in Nature. These elective affinities draw man and man together, and bind them in a close spiritual intercourse and mutual influence, even transcending their difference in culture and nationality. We can trace some remarkable instances of such "spiritual genealogies" in History.

In this paper the author tries to establish the above thesis by examining and quoting from a variety of writers, both Japanese and foreign, principally among the latter Goethe, Carlyle, Mazzini, and Emerson. The correspondence of Goethe and Carlyle, Mazzini's essay on Carlyle's writings, and the correspondence of Carlyle and Emerson are the chief sources from which the substance of the present treatise is derived.

In his letter to Goethe, dated April 15th, 1827, Carlyle writes: "It is you more than any other man that I should always thank and reverence with the feeling of a Disciple to his Master, nay of a Son to his spiritual Father." In 1844, when the English government opened Mazzini's letters and traduced his character, Carlyle sent a letter to the *Times* (June 15th), testifying: "I have had the honour to know M. Mazzini for a series of years, and I can with great freedom testify to

all men that he, if ever I have seen one such, is a man of genius and virtue, a man of sterling veracity, humanity, and nobleness of mind, one of those rare men, numerable, unfortunately, but as units in this world, who are worthy to be called martyr souls." In his letter to Emerson, dated April 8th, 1854, Carlyle writes: "It remains true, and will remain, what I have often told you, that properly there is no voice in this world which is completely human to me, which fully understands all I say, and with clear sympathy and sense answers to me, but your voice only." These quotations will be sufficient to prove that those men, though different in culture and nationality, were firmly bound together in spiritual unity and mutual regard, which alone forms the true foundation of real international amity and world peace.

In conclusion the author finds in the ancient sayings transmitted from the mythical age of gods the true expression of the enduring national identity of the Japanese people, and traces its tradition down to this day. Its chief crystallization in modern times is found in Meiji Tenno's "Imperial Rescript on Education," which after World War II the Adenauer government of West Germany adopted as its guiding rules for rebuilding the fallen Fatherland. The author continues to discuss how since the Meiji Era the Western culture has been assimilated into the life and spirit of the Japanese nation through its most prophetic representative books, including the writings of Goethe, Carlyle, Emerson, and Wilhelm Wundt.